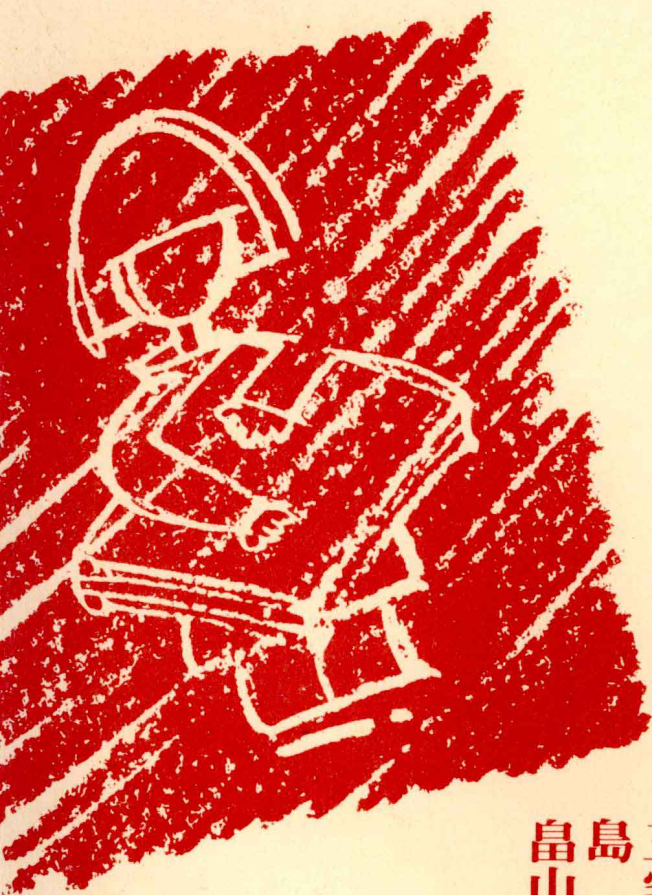


児童文学はじめの二歩



三宅興子
島式子
畠山兆子

世界思想社

カント文字のはじめの二歩



三宅興子
島式子
畠山兆子

世界思想社

著者紹介

- 三宅 興子…大谷女子短期大学勤務
19世紀のファンタジー作家を中心にイギリス児童文学研究
- 島 式子…聖母女学院短期大学勤務
バージニア・ハミルトンをはじめ現代のアメリカ児童文学研究
- 畠山 兆子…大阪樟蔭女子大学・梅花女子大学他非常勤講師
小川未明を中心に日本児童文学研究

児童文学 はじめの一步

定価 1,800 円

1983年 4月20日 初版発行

著 者

検 印 廃 止

み やけ おき こ
三 宅 興 子
し のり
島 式 子
は たけ やま ちよう
畠 山 兆 子

発行者 高 島 国 男

本 社 京都市左京区岩倉東五田町77
電話(721)6506~7 振替京都2908
東京支社 東京都千代田区神田神保町3-19
電話(230)2483

世界思想社

©1983 MIYAKE, SHIMA, HATAKEYAMA Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

(印刷・製本 太洋社)

ISBN4-7907-0243-X

はじめに

私たち3人は、子どもひとりひとりが、その子に適した本と出会ってほしいと願っている。それは活字文化が、本来は、1人の人の個性的な手づくりから出発したものであり、独創的な芸術や伝承のうえに立つ文化や時代をつきぬけてきた思想と出会う場であるからである。ともすれば、画一的な情報だけを送り続けているマスコミや、画一的な教科書を一方的に与えられるあまり、内なるエネルギーを発散させる場所をなくして、疲れがちな子どもたちの休息の場は、いままで以上に必要となるだろう。

子どもの文学は、「子どもが人類にとって、不可欠の要素であるように、文学の不可欠の要素であって、子どもや子どもの本を、特殊な片隅に追いやろうとして境界線をひこうとしても、それは不自然なものになってしまうだろう」(J. R. タウンゼンド『児童文学批評のあり方』『児童文学評論』No. 11)と今日では考えられるようになってきた。しかし、ここにくるまでに、子どもという存在そのものを発見してくる歴史があり、子どもの生存権を認め、学習権を確立してきたうえに立って、児童文学が成立してきたという事実にも注目しなければならない。

本書は、はじめて児童文学を学ぶ方々の、児童文学を楽しむ手がかりになったり、児童文学観を確立するための道案内になるようにと編まれた。そこで、文学を狭義な枠に閉じこめないように心がけ、章分けを文学の歴史を意識しながら、ジャンルごとに流れを迎える方法をとってみた。特にとりあげたい主題やグレードによる章、周辺領域も及ばずながらとりこんだものにもしている。

児童文学へのアプローチとしては、理論、歴史、実践という3つの面が考えられるし、隣接する分野(児童心理学、精神分析学、国語教育学、民衆社会史、等々)から考察することも可能であろう。私たち3人は、それぞれ、イギリス、アメリカ、日本の児童文学を専攻としているため、可能なかぎり、同一線上でそれらを論じ、比較検討してみた。結果として、その3ヶ国のものを中心になっている。また、対等の基盤にのせきれなかったものも多く、分担執筆による過

不足も生じて、今後の課題を数多く残している。

なお、執筆分担は、次の通りである。

第2，3，4，9，10，13，18章

三宅興子

第5，6，7，14，17章

島 式子

第1，8，11，12，15，16章

畠山兆子

著 者

目 次

はじめに

第Ⅰ部 物語

第1章 伝承文学——児童文学の源流——	2
第2章 教育読物の系譜	17
第3章 冒険物語——無人島から大都会へ——	28
第4章 歴史物語の視座	41
第5章 学校物語——その視点のずれ——	54
第6章 苦悩する家庭物語	67
第7章 動物物語の楽しさ	81
第8章 空想のはばたき・童話	94
第9章 ファンタジーの魅力	101
第10章 推理小説とSF	120
第11章 幼年文学の重要性	124
第12章 戦争児童文学の深まり	133
第13章 伝記物語のおもしろさ	146
第14章 ノンフィクションの可能性	153

第Ⅱ部 詩歌

第15章 甦るわらべうた	164
第16章 詩——ことばの宝庫——	173

第Ⅲ部 児童文学の周辺

第17章 児童劇を読む	184
第18章 絵本の多様性	190

ブックリスト・もう少し学びたい人のために・児童文学年表

おわりに

索引

第 I 部
物 語



The History of Little King Pippin より

金色の影



第 1 章

伝 承 文 学

——児童文学の源流——

(1) 物語の誕生

人間は、ことばを使うことによって、自然や事物から自らを自由に解放することができるようになった。つまり、個々の犬ではなく、犬全体をさす「イヌ」の話を獲得したとき、人間は自然から自らを解放したのである。だがその結果、人間は、犬そのものをみるよりもことばで犬を知ったつもりになり、ことばを通してしか経験や事実を語れなくなってしまった。スイスの分析心理学者ユング C.G. Jung は、世界の昔話が共通する典型的なイメージをもつことから、人間の無意識層には人類に共通の普遍性をもつ物語の元型があると考えた。人間は、なんらかの体験をするとそれをできるかぎり直接的に伝えようとして話をする。それが伝承文学のはじめであり、時代をこえて語られるならば、そこには人間の心の普遍性につながる元型をもつ物語があったことになる。人間は、原体験をするたびに限りなく物語を生みだし、口から口へと伝えられたそれら物語は、地域と時代の有形無形の文化を吸収しつつ、洗練された伝承文学へと発展してきた。そして、それらの物語は、おとなと子どもの区別のない、それを必要としたすべての人間の共有財産であった。

タウンゼンド J.R. Townsend は、『子どもの本の歴史』 *Written for Children* (1965) のなかで児童文学の誕生を、「ひとたび小説(大ざっぱに言って、大人のための技巧的なつくり話)が物語(すべての人々のための素朴なつくり話)にとってかわりはじめると、そこに児童文学が割りこむための論理的な割れ目が生じた」(上, p.23)と述べているが、まさにこのとき、伝承文学は子ども部屋へと払い下げられたのである。

マックス・リュティ Max Lüthi は、『昔話の本質』*Es War Einmal* (1962) のなかで、「昔話の年齢」を「五歳から十歳までの間」(p.10)としたが、なぜ子どもたちはある時期に昔話を好むのだろうか。精神分析学者ベッテルハイム Bruno Bettelheim は、『昔話の魔力』*The Uses of Enchantment* (1976) のなかでそれについて明快に答えている。

「昔話は、子どもの心をはげしく苦しめる内的な圧迫について、子どもが無意識に理解するような語り口で語り——成長にともなう最も重大な内的葛藤を軽んじたりせず——さしせまった心理的な問題を、一時的に、また永久に、解決する方法を示しているのである」(p.23)。

複雑化した社会で神経をすり減らす現代人は、昔話が気付かぬうちに心に与える効用を、再認識する必要があるであろう。なぜなら、「昔話の歩みは、つかれた人々に夢を呼びもどし、笑いをとりもどし、いまの世界を生き抜き、未来のために戦う心を耕してきた」(稲田浩二『昔話は生きている』1977, p.190) 民族の貴重な知恵だからである。

日本では、講談・落語・漫才など豊かな話芸が発達して今日にいたっているが、それらは語り手と聞き手の呼吸がぴったりあったとき、最高のおもしろさを発揮する。語り手は声だけではなく、聞き手の存在に支えられてまさに全身で語るのである。ところで、筋ではなく語りとして昔話を話せる現代人は、どれだけいるのだろうか。子ども時代に語り聞かせてもらった経験がない者が、語り手となるためには大きな努力を必要とする。昔話を吹き込んだレコードやカセットが商品となる今日、それらによって現代人の話す能力の低下はいっそう拍車をかけられることになるだろう。

(2) 伝承文学とは何か

文字で書かれた文学に対して、口伝えによる文芸を、柳田国男は「口承文芸」と呼んだ。神話・昔話・伝説・叙事詩・寓話・ことわざ・唱えごと・なぞなぞ・民謡・わらべうた・語りものなど、広く口伝えの文芸全体をさすことばである。

おとなの文学がそうであるように、子どもの文学もまた口承文芸と深くかわって生まれてきた。児童文学の源泉は、口承文芸のすべての領域に及んでいることだろう。しかし、その広い領域のすべてに言及することは困難であり、

問題の拡散になりかねない。そこで、ここではその範囲を児童文学と関係が深い、神話・叙事詩・寓話・昔話・伝説の5つとした。この5領域について、ここで簡単にその特質を述べておくことにする。

神話は、もともと宗教的なもので、文化的な力をもち、天地創造についての物語である。主人公はつねに霊格（超自然的性格）を有し、人間の姿で登場する。叙事詩は、物語詩の1ジャンルとして使われることもあるが、広義には物語詩全体をさして使う。寓話は、ある道徳的思想を叙述するためのはっきりした実例であり、象徴である。実用的な目的をもち、煎じつめるとことわざや格言となる。昔話は、「むかし」「ざっと昔あったと」などのきまり文句ではじまり、「どっとはらい」「これで一期（いちご）栄えた」などのきまり文句で終わる空想物語で、聞き手の相づちで話が進むという話し方をされる。伝説は、特定の場所や人物と結びつき、事実として聞き手が信じることを求め、話の内容の大筋だけが伝えられていくものである。

伝承文学の文字化には、研究的立場と創作的立場がある。前者は、学問の資料として口承の原話を正確な記録として文字化する。これに対して後者は、原話から、または記録された資料から、話の基本構造や様式はそのままに、その時代の解釈による想像を加えて文学とするための文字化である。これを普通、再話という。

ところで、一般に使用されている伝承文学にかかわることばに「民話」がある。このことばは、民話を民衆の話と考え、話の底に潜む民族の生活や思想など心の営みの歴史を究明しようとした木下順二を中心とする「民話の会」によって、1955(昭和30)年前後に普及された。また、彼らは、「民話を素材としてはいるが、解釈にも表現にも作者が作者自身のものを自由に駆使した場合」(木下順二「あとがき」『日本民話選』1958, p.259)には、「再創造」ということばを使用した。「民話の会」は、伝承文学の再話化をうながす文学創造運動として、大きな成果をあげたが、再話すなわち民話としたり、再創造作品まで民話に含めるなどの用語の混乱をのちのちに残した。今日民話の語は、「民話の会」とは関係なく、民間説話(民俗説話)の略語として、「昔話・世間話・笑話・伝説を含む総称として用ゐるのがよからう」(『民話の誕生と伝承』『解釈と鑑賞』1975, 11月号, p.26)と臼田甚五郎が述べるように使用するのが一般的である。再創造作品は、もち

ろん民話ではなく創作である。

(3) 伝承文学の研究——昔話の場合——

昔話研究の基礎は、ライエン Friedrich von der Leyen が『メルヘン（昔話）』*Das Märchen* (1911) のなかで、「事実上グリム兄弟の理論的見解の影響は、現在のメルヘン研究の中にまで跡づけられるのである」(p.24) と述べているように、グリム兄弟に始まる。グリム兄弟以後、昔話はさまざまな立場から考察されてきたが、それらをマックス・リュティは、「今日では昔話は民俗学、民族学、心理学、文芸学の研究対象である」(『ヨーロッパの昔話』*Das Europäische Volksmärchen*, 1947, p.190)と述べ、それぞれの研究方向を次のように指摘している。

「民俗学は昔話を文化史的・精神的ドキュメントとして研究し、社会におけるその役割を観察する。心理学はその物語を心的経過の表出と考え、聞き手あるいは読者への影響をたずねる。文芸学は昔話をして昔話たらしめるものを確認しようとつとめる。……民俗学研究者は根本的には、昔話というひとつの形成体の機能と生物学に興味をもち、心理学研究者はその形成体が人間の心の欲求から生まれてくることに興味をもち、文芸学研究者はその形成体自身と、文学の世界におけるその形成体の位置に興味をもつ」(p.190)。

これらの学問のうち民俗（族）学的研究には3つの方向があり、その1つは比較研究である。フィンランドのアールネ A.Aarne は、昔話を、動物昔話・本格昔話・笑話の3つに区分し、対応する物語を組み込んで番号を付し、『昔話のタイプ目録』*The Types of the Folktale* を1910年に発表した。これにトムソン S.Thompson が、ヨーロッパ以外の昔話を加えて、今日 ATh560～649(呪物)のように使用される分類を作りあげた。

日本では関敬吾が、『日本昔話集成』（全6巻）（1950～58）において、アールネの分類をとりいれ3分類を行なった。なお、本格昔話とは、昔話の基本構造「主人公の誕生」「生い立ち」「困難克服」「幸福な結末」をふまえた非凡な人物の伝記的物語をいう。詳しくは、関敬吾の『日本の昔話 比較研究序説』（1977）が参考になる。2つ目は、特定民族の所産として、もしくは国民性、民族性との関係を中心課題とした研究である。日本では、柳田国男の一国民族学理念との関係で、この立場が強く主張された。3つ目は、伝統文化財が社会生活において、

いかなる機能をもったかという研究である。

心理学的研究で有名なのは、フロイト心理学のフロイト学派とユング心理学のユング学派である。フロイト Sigmund Freud は、個人的な無意識をその研究対象としたのに対し、ユングは集団的無意識を研究対象とした。今日、心理学的メルヘン解釈をフロイト学派の性的衝動の一面性から解放したのは、ユング学派の功績とされている。ユング学派の第一人者フランツ Marie-Louise von Franz の『おとぎ話の心理学』*An Introduction to the Psychology of Fairy Tales* (1970) や河合隼雄の『昔話の深層』(1977) などが参考になる。

文芸学的研究には4つの立場がある。第1は、主題論的研究で比較文芸学である。第2は構造的な研究で、プロップの『民話の形態学』(1972)の構造分析に代表される。第3は、原型論的研究で、マックス・リュティがこの立場にいる。日本では、小澤俊夫の『世界の民話』(1979)が、この立場で日本の昔話をとりあげている。第4は、機能的な研究で、社会学および人類学における現象学的傾向をもつものである。

なお、リュティは、『ヨーロッパの昔話』のなかで、ヨーロッパの昔話の特性を、「一次元性」「平面性」「抽象的様式」「孤立性と普遍的結合の可能性」「純化と含世界性」と説明している。この指摘は、ヨーロッパのみならず日本の昔話を考えるうえでも参考となる。

(4) 伝承文学の収集

ドイツ語のメルヘンには2つの意味がある。民族メルヘン *Volksmärchen* と創作メルヘン *Kunstmärchen* で、前者は伝承文学を、後者は創作文学を意味している。普通、民族童話、創作童話と訳されているが、民族メルヘンは、内容的には民話と訳するのが適当であろう。ただし、学術的にはメルヘンをそのまま使用している。混乱をさけるためにも用語の使用は厳密にしたいものである。翻訳書名、たとえば『グリム童話集』*Kinder- und Hausmärchen* (1812) などを除いて、ここでは童話は創作にのみ使用することにする。

グリム兄弟 Jacob & Wilhelm Grimm 以前の収集刊行で、彼らの童話集に影響を与えたと考えられるものにイタリアのストラパローラ Giovan Francesco Storaparola の『楽しい夜』*Le Piucevoli Natti* (1550~53) やナポリ方言で書か

れたバジール Gian Battista Basile の『お話の中のお話』*La Cunto de li Cunt* (1634~36)がある。『お話の中のお話』は、1925年クロッチェ Benedetto Croce が標準イタリア語に直し、今日『ペンタメローネ』*Pentamerone* と呼ばれ、イタリア児童文学の源泉となっている。

1697年には、フランスのペロー Charles Perrault が、『ペロー童話集』*Histoires ou Contes de Temps Pasé* を出版する。もっとも、ペローも、先の2冊も子ども対象ではなく、また民衆から直接採集した民俗学的なものでもない。それらは、おとな向きに書かれたものを子どもたちが結果的に自分たちのものにしたのである。

ドイツにおいては、民族の文学的宝である民話収集刊行の機運が18世紀末から高まり、19世紀にはいよいよ盛んになった。そのきっかけが、1778年ヘルダー J.G. Herder が編集刊行した歌謡集であった。これを受けついたのが、アルニム Achim von Arnim とブレンターノ Clemens Brentano の古いドイツ民謡を収集した『ふしぎな角笛 ドイツのまざあぐうす』*Des Knaben Wunderhorn* (1805~08)である。この民謡集の第2集、第3集にグリム兄弟は、彼らの収集民謡を提供している。1782年から86年にかけて、ムゼーウス Johann Karl August Musäus が、伝説を中心に『ドイツ人の民話』*Die Volksmärchen der Deutschen* を出版。ヒューリマン Bettina Hürlimann は、『子どもの本の世界／300年の歩み』*Europäische Kinderbücher* (1959)において、ムゼーウスの手紙を引用しながら当時の状況を、「『この種の駄作』というムゼーウスの表現には軽い恥じらいの色がみえ、民話の仕事が依然としてそうまじめな仕事とは考えられていなかったことがわかる。また、民話に『手を入れ、十倍もすばらしいものにする』というムゼーウスの注釈は、民衆文学の純粹さとそぼくさを求めたグリム兄弟の時代が、まだ到来していないことを示している」(p.17)と紹介している。このような動きのなかで、1812年、昔話と伝説を収集したグリム兄弟の『グリム童話集』第1巻が刊行されたのである。

『グリム童話集』が、民俗学的文献としての配慮に欠けた、ロマン派の文体や教育道徳的立場への固執をまぬがれたのは、文献として厳正に記録しようと精力的に収集したヤーコプと、豊かな学識をもつ詩人肌のウィルヘルムが、共同で編集したためである。しかも、初版から第7版の決定稿まで、改訂増補が

なされつづけている。

初版 第1巻——1812年（86話と注）

第2巻——1815年（70話と注） 計156話

再版 第1巻，第2巻——1819年（86話，75話） 計161話

第3巻——1822年（注釈編）

3版 第1巻，第2巻——1837年（86話，82話） 計168話（聖者物語9）

4版 第1巻，第2巻——1840年（86話，91話） 計177話（ “ 9）

5版 第1巻，第2巻——1843年（86話，108話） 計194話（ “ 9）

6版 第1巻，第2巻——1850年（86話，114話） 計200話（ “ 10）

第3巻——1856年（注釈編 3版）

7版 第1巻，第2巻——1857年（86話，114話） 計200話（ “ 10）

（高橋健二『グリム兄弟』1968，p.131）

口承の原話の文字化には研究的立場と創作的立場があるが，グリム兄弟の時代には，それらは未分化であった。兄ヤーコブは資料としての記録を，弟のウィルヘルムは文学としての再話を目指しており，そこには当然矛盾が生じた。ヤーコブは，ウィルヘルムが文章を美しい表現に改めるのに不満であったが，それによって今日まで『グリム童話集』が愛されつづけてきたことは事実である。ウィルヘルムの加筆については，「いばら姫」の比較が，再話を考える上にも参考になる。

初稿とは，「グリム兄弟の童話，エルザスのエーレンベルク修道院のオリジナルによる原形」で，1810年に書かれており，「いばら姫」の筆跡はヤーコブである。初版は1812年のもの。決定稿は，1857年の第7版のことである。なお「いばら姫」には，初版以来整理のため「50番」という番号がつけられており，グリムの50番というのは「いばら姫」のことである。いばら姫が眠りから目ざめる部分を比較してみると，次のようになる。

初稿 「城に近づくと，王子は眠っているおひめさまにキスしました。すると，みんな眠りから目ざめました。」

初版 「とうとうしまい古い塔の中にはいると，そこにいばら姫が横になって眠っていました。王子はひめの美しさにたいそうおどろいたので，かがんで，ひめにキスしました。そのとたんに，ひめは目を

さしました」。

決定版 「とうとう、王子は塔にやって来て、いばら姫の眠っている小さいへやの戸をあけました。そこに寝ているいばら姫がたいそう美しかったので、王子は目をそらすことができませんでした。王子はひぎをついて、ひめにキスをしました。キスをしてひめにさわると、いばら姫は眠りからさめて、目を開き、ほんとうになつかしように王子を見つめました」。

分量的に増加していることは、一目瞭然であるが、登場人物の感情を表わす表現が、初版に比べて決定版にはより多く加筆されている。

昔話の民俗学的研究は、グリム兄弟に始まるが、本当の意味の再話もまた、彼らに始まる。それでは、彼ら以前の再話と彼らの再話は、どのように違うのだろうか。ペッテルハイムは、ペローとグリムの「赤ずきん」を比較して、次のような結論に至っている。ペローの再話は、「ただの教訓話」（『昔話の魔力』p.225）にすぎず、しかも悪いことに「昔話の価値を失う意味のおしつけ」（p.225）をしているという。ペローとグリムとバジール・の「いばら姫」の比較においても、ペロー再話の矛盾を指摘し、「ペローが昔話をまじめに取り上げていたわけではなく、むしろ、それぞれの物語のおしまいにつけた、機知にとんだ道徳的な詩のほうに重きを置いていたために、こうなっているのだ」（p.301）と批判的である。

これに対してリュティは、「いばら姫」の比較において、「私たちはペローの優雅と機智、グリムのこまやかな心情、バジールの力と勢、さらに三つの話にあふれているユーモア、そのどれも欠きたくない」（『昔話の本質』p.29）と述べ、それぞれの特色を評価している。ポール・アザール Paul Hazard は、『本・子ども・大人』*Les Livres, les Enfants et les Hommes*（1932）のなかで、フランス人の「論理に対する情熱」の例に、ペローの仙女の合理主義をあげているが、「眠れる森の美女」の王女の服装を、「王女は正装姿、それまたたいそう華やかな正装姿でいます。王子は、しかし、お祖母様の時代のような服装で、古風な高い衿がついていますね、などとはいいいません」（『ペロー童話集』p.166）と書く合理主義精神は、再話の限界をこえている。ペローの再話は、物語の随所にルイ14世の時代の風物が描きだされており、この点についてはリュティも、昔話の限

界をこえるものと認めないわけにはいかない。さすがに、グリム兄弟の再話にはこのような逸脱はないが、ウィルヘルムの加筆には、リュティが指摘する登場人物の平面性という昔話の特質を犯す描写や、冗長な描写（「かえるの王様」冒頭）などがないわけではない。

『グリム童話集』は、すぐれた仕事ではあるが、一方で彼らが採集しなかった物語を、価値のないものとして忘れ去らせる役割も果たした。また、文字化による定着についても、彼らの採集が、望ましい時期に望ましい形で行なわれたか、研究が進むにつれて問題にされるにいたっている。

『グリム童話集』より少し遅れて、1842年にスカンジナビアで、ノールウェーのアスビョルンセン Asbjørnsen とモー Moe が、昔話の採集を行なった。『太陽の東 月の西』*Samlede Eventyr* (1944) は、死後編纂されたものの一部である。また、1889年には、民俗学者で神話学者のラング Andrew Lang が、12色の色の名前を付けた世界の伝承文学の再話集の第1巻『そらいろの童話集』*The Blue Fairy Book* を刊行している。1890年と1894年には、ジェイコブス Joseph Jacobs が、2冊の『イギリス昔話集』*English Fairy Tales* (1890), *More English Fairy Tales* (1894) を出版し、イギリス昔話の再話の基礎を築くことになった。

日本における伝承文学の収集刊行は、グリム兄弟のように研究と再話が同時に進化したのではない。1894（明治27）年から96（29）年にかけて、博文館から出版された『日本昔噺』（1894～96）全24篇は、日本のグリムといわれた巖谷小波の再話であるが、彼の再話は、先行文献からの文学としての再話であり研究的配慮は払われてはいない。その点では、1911（明治44）年石井研堂が出版した『日本全国 国民童話』は、雑誌の編集者であった彼が、各地の昔話の口授や筆録からまとめた先駆的なものであった。

研究的収集刊行は、岩手県遠野地方の神話・伝説・昔話を収録した『遠野物語』（1910（明治43））まで待たねばならない。これは、柳田国男が、佐々木喜善の話をまとめたもので、日本の民俗学史上特筆すべきものといわれている。柳田国男の影響を受けた佐々木喜善は、1931（昭和6）年には、遠野地方を中心とした昔話採録集『聴耳草紙』を出版している。なお全国的なものとしては、柳田国男監修の『日本昔話名彙』（1948）、『日本伝説名彙』（1950）や、関敬吾の『日本

昔話集成』(全6巻)(1950~58)などがある。

巖谷小波につづく子どものための再話に、1920(大正9)年から21(大正10)年にかけて培風館から出版された『標準お伽文庫』(全6巻)がある。森林太郎、松村武雄、鈴木三重吉、馬淵冷佑の編著であるが、これも口承の原話からの再話ではなく、先行文献にたよったものであった。

1952(昭和27)年に出版の坪田譲治再話『鶴の恩がえし 日本昔ばなし集』は、その「あとがき」に柳田国男の資料を参考にしたとある。坪田譲治の弟子であり、子どものための再話では第一人者といわれる松谷みよ子の再話(『日本の昔ばなし』全3巻、1977~80)は、「日本をもっと知りたい、知識としてではなく、じかにこの掌で触れてみたい」(『民話の世界』1974, p.10)との願いから、語りの呼吸を大切にした再話になっている。

(5) 伝承文学の再話

どのような原話をどのような意識で再話するかによって、物語は微妙に異なる。そこで、ここでは「小さ子」伝承を例に、再話のあり方を考えることにする。「小さ子」伝承とは、異常に小さな姿で世の中に出現する主人公の物語である。

「一寸法師」のほか昔話には、「五分次郎」「指太郎」「すねこたんばこ」「あくと太郎」などと呼ばれる「小さ子」がいるが、ここでは古くから再話されている「一寸法師」のうち、歴史的なものを4つとりあげることにした。

1. 『御伽草子』書林 渋川清右衛門 寛文(1661~73頃)
2. 『日本昔噺』第拾九編 巖谷小波(1896)
3. 『標準お伽文庫』森林太郎、松村武雄、鈴木三重吉、馬淵冷佑(1920~21)
4. 『鶴の恩がえし 日本昔ばなし集』坪田譲治(1952)

これらの「一寸法師」は、すべて鬼退治をして幸福になる庶民の願望であった卑賤者立身出世型物語であるが、『御伽草子』のみ、宰相の姫様を策略を用いて手に入れる求婚・恋愛成功のプロットが含まれている。

次ページの表は、「一寸法師」の構成を出生、出立、困難克服、幸福の4点で比較したものである。出立、困難克服、幸福の箇所、再話者の子どもへの配慮が感じられるが、ここでは、それぞれの書き出し部分を引用して比較するこ